

夢追い人列伝

その三 「桑原英雄伝」

初めに

本県バスケットボール競技における先覚者の功績を伝える「夢追い人列伝」シリーズ、三人目は、昭和50年代の男子高校界を牽引した桑原英雄氏である。

桑原氏にはちょっとした風聞が伝わる。昭和37、38年当時、日本体育大学バスケット部の主力選手だった氏は、昭和39年開催の東京オリンピック日本チームの第一次候補選手にリストアップされていたという。巷間まことしやかに伝わる伝説の真偽を本人に確かめると、「— あいにく、そんな名誉な話は今まで聞いたことがない」。

桑原氏が教員団チームに入った当時の吉村旦監督によれば、シュートはもちろん1対1の駆け引きも巧みで、とりわけドライブインはツポにはまると一瞬でマークマンを抜き去っていたという。五輪候補異聞はあながち噂話とばかりは言えない気がする。

大学卒業後、山口県の高校教員になり、やがて県立宇部工業高校を率いて本県バスケットボール史に一時期を画すことになる桑原英雄氏の軌跡を紹介する。

桑原 英雄 (くわはら ひでお)

昭和17年1月生まれ・山口県宇部市在住

日本体育大学保健体育学部卒業

(一般社団法人)山口県バスケットボール協会顧問

元山口県立高等学校教員(昭和39年4月～平成18年3月)



1 日本体育大学キャプテン

桑原氏は、宇部市立神原中学校に入学した際、バスケット部がアウトコートでシュートに興じるのを目にして何だか面白そうに感じたと言う。

就職希望だったが工業系は敷居が高く、県立宇部商業高校に進む。本人曰く「仲間に誘われてバスケット部に入ったけれど、自分よりチームメートの方がテクニックも能力もずっと上だった」。それでもスピードやスタミナを見込まれてか、県立豊浦高校中心で出場した昭和34年の東京国体では、宇部商高から選ばれた2名の補強選手の中に桑原氏の名前もあった。試合終盤に早稲田大学のコートに立ったことだけは記憶にあると氏は笑う。

当時、高体連専門委員長だった宇部商高の柏村勝監督は、出身である日本体育大学への進学を勧める。言われるまま推薦入試を受け入学して寮生活を始めた桑原氏は、すぐに後悔する。200名を数える部員がいて上下関係は厳しく、苛烈を絵に描いたような練習に同級生は一人また一人と欠けていく。帰省は年に1回あるかないか、我ながらよく辛抱したと氏は語る。しかし、センスと天分もあったのだろう、3年次にはGF(ガードフォワード)としてレギュラーに名を連ね、しかも最上級生になると主将に指名された。山口県出身者で日体大バスケット部のキャプテンを務めたのは、後にも先にも桑原氏だけである。その頃は2軍の練習が午後4時から、1軍の練習は7時頃から始まりその両方に出ていた。よく壊れなかったものだと本人は述懐する。

当時の大学界を牽引していたのは、「関東大学連盟」所属の明治大や立教大、慶應義塾大などの有力チームである。日体大は芝浦工大などとともに別組織の「関東大学新連盟」に加わっていたが、慶應大とは日吉校舎でしばしば練習試合をしていた。とにかくいやというほど走らされ、ゲームでもまずは速攻だった。攻守の戦術は教わっても個人技術の手ほどきを受けた覚えはなく、テクニックは自ら工夫して身に付けるものだった。主将だった4年次は春季トーナメント戦、秋季リーグ戦ともに優勝して他を寄せ付けなかったが、インカレ（全日本大学選手権大会）ではベスト4が遠かった。日体大はその後数年してインカレ初制覇に輝き、今日では男子の最多優勝回数14回を誇っている。

昭和39年4月、大学を卒業した桑原氏は県立美祢工業高校（現美祢青嶺高校）に保健体育科教員として赴任する。奇しくも同校には、宇部商高時代の恩師でありやがて桑原夫妻の仲人となる柏村氏が勤務していた。桑原氏は早速教員団のポイントゲッターとして国民体育大会や全日本教員選手権大会等で卓越した技倆を披露し、30歳半ばまでプレーを続ける。現役を退いた後は監督として指揮を執り、後の教員団躍進の礎を築いた。また、奉職後ほどなくして日本公認審判員資格を取得し、昭和43年の広島インターハイには審判員として派遣されるなど各大会で精力的に活動した。

氏は美祢工高で9年間男子バスケット部の強化に余念のない日を過ごす。しかし、上位チームの壁は厚く戦績は最高がベスト4入賞にとどまった。山口にその人ありと言われるようになるのは宇部工業高校に転勤してからのことであるが、その躍進ぶりを語るには、昭和40年代の宇部商業高校の活躍を抜きにするわけにはいかない。

2 宇部商業高校の活躍

県協会設立60周年記念誌『夢を追う』は、戦後から平成18年までの協会の歴史について「黎明期」－「草創期」－「充実期（前・後期）」－「発展期（前・後期）」の4期に分けて概説している。その「充実期《前期（昭和41～51年）》」に次の一節がある。

（高校界の）前期の男子は、草創期に引き続いて豊浦高校の活躍が光り、……際だった存在感を示していた。その豊浦高校の前に立ちはだかったのが、濱村悦巳監督の鍛えた宇部商業高校である。昭和40年代における高校総体の出場校はこの両校のどちらかに限られ、中国大会でもベスト4入りを果たすなど山口県高校男子バスケットの双壁として知られた。昭和50年になって両校の間に割って入り、宇部商業高校に代わって新たに豊浦高校との2強時代を築いたのが、50年、51年と高校総体に出場した宇部工業高校である。同校を育てたのは日本体育大学で4年次に主将を務めた桑原英雄監督であるが、やがて岩国高校が参戦し豊浦高校に代わって宇部工業高校との2強時代を演出するまで、豊浦－宇部工の頂上決戦は続けられた。

－『夢を追う』～山口県バスケットボール協会60年のあゆみ～から－

上に述べられているように、昭和30年代前半から40年代半ばにかけて本県高校バスケット界をリードしたのは豊浦高校であった。渡辺一平監督のたゆまぬ指導が実を結び、昭和32年に全国高校総体（インターハイ）初出場を遂げると昭和46年までほぼ連続して全国の舞台に立ち、ベスト8入賞にも2度輝いている。豊浦高校を乗り越えなければ全国大会への道が開かれない状況の中で、最初に名乗りを上げたのは濱村悦巳氏率いる宇部商業高校であった。

濱村氏は、県立久賀高校（現周防大島高校）から日本体育大学に進み、桑原氏の3年先輩に当たる。昭和37年、新設の美祢工高に転じた柏村氏と入れ替わりで宇部商高に赴任した。ちょうど宇部インターハイの年で、県予選は豊浦高校が優勝、準優勝の宇部商高は開催県枠で出場するが両校とも1回戦で苦杯を喫した。その後も引き続き豊浦高校が県下に覇を唱える中、昭和42年のインターハイ予選決勝で宇部商高が初めて豊浦高校に土をつける。宇部インターハイから6年経っていた。43年の広島インターハイ予選決勝も同じ顔合わせになり、4点差で宇部商高が連覇を果たす。後に回想録「豊高での40年」で渡辺氏は、次のように敗戦の弁を述べている。「（昭和42年は）経験豊かでシュート力に優れた宇部商業に敗れた。選手に申し訳なく、誠に残念であった。……（昭和43年の）インターハイ予選では、宇部商業のオールコートディフェンスに敗れた」。

連敗に奮い立った豊浦高校は、昭和44年から3年連続でインターハイ予選を制して雪辱を果たす。しかし、続く47年からの3年間は再び宇部商高に軍配が上がり、かくして昭和40年代の覇権争いは豊浦高校—宇部商高のつばぜり合いに終始した。

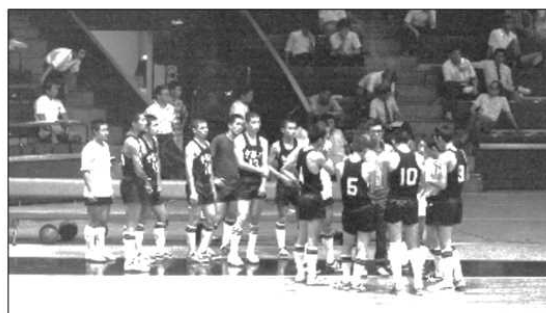
この間で特筆すべきは、宇部商高の全国選抜優勝大会出場である。3月下旬に東京開催となったこの大会は昭和45年度に創設され、48年度までは出場校数の都合で中国地区からの出場は優勝校だけに限られていた。宇部商高は、昭和46年に続き48年も中国予選決勝で敗れるが、この年に優勝した広島商業高校は前年度の第3回大会で全国優勝を果たしており優先出場権を獲得していた。結果的に出場権を得た宇部商業高校は初戦で京北高校と対戦し6点差で涙を飲む。しかし、山口県勢として初めてバスケットの聖地である代々木第二体育館に立ったことは県内チームの大きな励みになった。因みに、京北高校はこの大会で三位に入賞している。

桑原氏によれば当時の濱村氏のベンチワークは創意に満ち、例えば本来封じるべきウィークサイドへの突破をあえて許しピンチプレーに引き込むなど、工夫が凝らされていた。濱村氏は教員団でもPG（ポイントガード）として桑原氏とコンビを組んで活躍し、さらに早くに日本協会公認審判員となり後進の育成にも大いに寄与した。

このように昭和40年代に名を馳せた宇部商高だったが、昭和49年の福岡インターハイ出場以降は表舞台から遠ざかるようになり、歴戦の栄光を引き継ぐ形で宇部工業高校が第一線に躍り出て来る。そこには、桑原氏の着任を契機として有力選手が同校に集まり始めたという事情もあった。

3 宇部工業高校の台頭

昭和48年4月に桑原氏が宇部工業高校に転任すると、それを機に宇部・小野田地区の勢力図は同校に傾き、昭和50年代の県高校界は「豊浦—宇部工」の構図に塗り替えられていく。両校とも中国大会の常連校であり、毎年のように高校総体予選で決勝戦を争うが、武運拙く豊浦高校は昭和52年しか勝利をつかめていない。一方の宇部工高は10年間で6回優勝を飾っている。残りは岩国高校が2回、高水高校1回である。



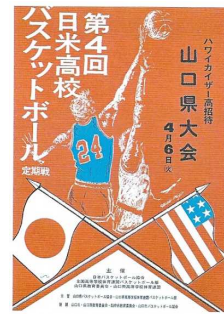
昭和50年東京インターハイ

桑原氏の指導のもと着々と力をつけた宇部工高は、昭和50年、東京インターハイに初

出場を果たし、早稲田大学記念会堂での初戦、帯広柏葉高校戦を見事勝利で飾る。ところが、「まさか勝てるとは思っていなかったので帰りの切符は買ってあった。翌日、安田学園高校に負けた後、大慌てで東京駅に走った」とは桑原氏の弁である。

この東京インターハイに先立つ5月の松江中国地区大会には珍しい記録が残る。県予選を2位で突破した宇部工高は、中国大会に初名乗りを上げた。ところが、1回戦の広島学院高校に0-2のスコアで敗れている。実は、国鉄のストライキにぶつかりやむなく棄権したのである（現在の棄権スコアは0-20）。選手は肩を落としたろうが、その無念さが全国大会初出場を呼び込む原動力になったのかも知れない。

宇部工高は続けて昭和51年の松本インターハイにも出場する。翌52年の松江総体予選は豊浦高校が制し、昭和53年の山形インターハイは宇部工高が返り咲いた。こうして両校がしのぎを削る中、昭和51、53年には山口市で日米高校バスケットボール定期戦が行われている。県内各校から有力選手を選抜して編成した山口県チームは、団長が柏村高体連専門委員長で、桑原氏は監督として采配を振るった。この親善大会について『夢を追う』は次のように述べている。



昭和51年 日米高校親善試合プログラム



昭和53年 日米高校親善試合プログラム

……昭和51年にカイザー高校、53年にはルーズベルト高校とハワイの高校生の男子チームがそれぞれ親善試合に来日し、山口市でも本県高校選抜チームとの対戦が行われ会場は大いに盛り上がった。この親善試合は、高校チームのレベルアップの機会にとどまらず、各分野で国際化が着々と進展していく中、本県バスケット界においても世界に目を向ける機運を育む好機として大きな意味があった。

桑原氏は昭和51年から5年間にわたって宇部市バスケット協会の理事長に就き、事業の振興に努め協会の発展に尽力している。当時、宇部市では宇部女子高校（現慶進高校）も強豪として名を知られ、県下高校女子界をリードしていた。

また、昭和51年には宇部工業高校に新採用教員が5名配属されている。その中に後に国際審判員として広く活躍する小池正夫氏とともに、やがて高体連バスケット専門部長となる弘中幸雄氏



桑原氏、弘中氏、小池氏（左から）

の名前もあった。小池氏は早稲田大学在学中に日本公認審判資格を取得した当時数少ない学生公認の一人で、着任後はコーチとして桑原氏を支えるかたわら、県内外の審判活動に腕を振るった。

4 天覧試合

日米親善大会に挟まれる格好になった昭和52年のインターハイ予選は、豊浦高校が宇部工高を2点差で下す。一方その2ヶ月後の国体予選では、桑原監督率いる宇部選抜（宇部工・宇部商・小野田高校）チームが豊浦高校に競り勝つ。この年の青森国体は少年男子が全県出場で、山口県の初戦は対宮城県だった。ところが、そのゲームが天皇陛下を迎え

ての天覧試合に指定される。当時小野田高校のPGで国体メンバーだった現宇部工高監督・西村修氏によれば、「天覧試合とあってのものものしい警備の上に観客があふれ、会場は文字通り煮詰まっていた。こちらも舞い上がるような緊迫した雰囲気だった」。

それでも、山口県チームは補強選手のシュートが冴えリズムをつかんで快勝する。その勢いのまま続く京都府（洛南高校）戦も、桑原氏が教え子の中では最もセンスがあったと述べる浜本次郎選手の好リードもあり僅差ながら勝利する。次の福岡県（福大大濠高校）戦こそ力及ばなかったものの、下馬評を覆して名門・洛南高校を相手に勝利をもぎ取った快挙に地元は湧いた。

昭和54年のインターハイ予選決勝は枝折幸正監督の県立岩国高校が2点差で宇部工高を倒し、翌年も連続出場を果たす。巻き返しを図った宇部工高は昭和56年から3年連続で川崎・鹿児島・安城インターハイに駒を進めたが、2回戦の壁は越えられなかった。その後、県内の有力校が主導権争いを繰り広げる中、宇部工高は安城インターハイを最後に全国の舞台からしばらく遠ざかることになる。平成2年には桑原氏の転勤もあり、再び全国総体に同校が勇姿を現すのは平成14年まで待たねばならなかった。

5 徹底

高校を卒業した桑原氏の教え子は、ある者は社会人チームに所属し、ある者は審判員として汗を流し、さらにはミニバスの指導に情熱を傾ける者も出るなど、多くがバスケットと関わりを持ち続けている。その卒業生が一様に口を揃えるのは、氏の指導の厳しさである。それは、一言で表せば「徹底」に他ならない。手抜きを一切許さなかった。

ルーズボール、ボクシングアウトはことのほかやかましく、ゴール下シュートではポンプフェイクを必ずかけさせ、それが習慣化した結果ディフェンスがいなくてもボールを上げ下げする姿は周囲の失笑を誘ったが、桑原氏は当然とばかりにうなずいていた。外角シュートにもうるさく、ボールのもらい足から肘の置き方、シュートの軌道、手首の返しまで逐一手を取り足を取って教えた。相手のアウトサイドシューターに対しては、最初のショットを絶対に決めさせるな、ファールになっても構わないからプレッシャーをかけると語気を強める。シューターはシューターを知る、ということなのであろう。

平素の練習はマンツーマン主体でも試合ではゾーンディフェンスを採用し、特に対豊浦高校戦は例外なく2-1-2ゾーンを敷いた。マンツーマン気味に守るセンター以外の4人が組織的に連携して相手のシューターを執拗にマークする。「うちの選手の能力では、豊浦の華麗なプレーについて行けない。勝てるとすればマッチアップゾーンしかない」。後は「読みの力だ」と実際のゲーム場面を想定した反復練習に心血を注いだ。



一方、必要とあれば自腹を切って面倒を見る気配りの人でもあった。コーチを務める国体少年チームの合宿に当たって、選手の経費負担に配慮して自宅に寝泊まりさせることもよくあった。もちろん奥様の理解と内助がなければかなわない。「練習がきつかったことと、すき焼きが美味しかったことが忘れられない」。当時の選手の言である。また、桑原氏は宇部工高に併設された定時制課程に二度籍を置き、夜学生の面倒を見ている。

結局、宇部工高に16年間勤めて桑原氏は宇部高校へと転勤する。引き続き男子バスケ

ット部を指導するが、練習時間の制約などもあり戦績は県大会ベスト8が最高であった。要望があって同校の女子チームも教え始めたところ、自分たちも遠征して合宿がしたいと申し出たので、宿泊施設がある岩国市の高水高校に頼み込んだ。選手にとっては初めてのことで、ことのほか喜んだそうである。

その頃、枝折幸正氏が提唱して「桑原キャンプ」という合同錬成会を実施したことがある。これが機縁となって今日の「宇部日報杯」が生まれ、今では宇部市バスケット協会の全面的な支援のもと県内外から有力チームが集まる錬成大会として定着している。

桑原氏は定年退職後、平成18年まで宇部高校に勤めた。その後、平成22年の社会人クラブチーム「宇部レジェンド」設立と同時に請われてヘッドコーチに就任し、県予選で優勝して中国地区大会に出場するなど手腕を発揮した。

終わりに

桑原氏は、喜寿を過ぎた今日でも宇部工高の体育館に顔を出し、孫ほどの生徒相手にシュート技術やボールさばきの伝授に明け暮れている。趣味は40歳を過ぎて始めたゴルフと語るが、生き甲斐はバスケットであろう。「バスケットを取ったら他には何も無い人ですからね」。目を細める夫人の一言は、いかにも味わい深い。

耳に残る言葉がある。「ファールは3つで終わりと思え。残りの2つの内の一つは、やむを得ずチャージングになるケース、もう一つは、審判のミスジャッジだ」。身をもってバスケットを知る人ならではの教えであろう。試合を観ながら語った「ポイントはボールの反対サイドだ」という一言も忘れられない。「強いチームは必ずそこで仕掛けている」。なるほどとうなずかされる。

氏は、近年の東山高校の躍進に感嘆を隠さない。全国にその名を知られる同じ京都府の洛南高校に対して堂々と勝負を挑み、ついには打ち負かすその気概が凄いとうなる。福岡第一高校にしても、福大大濠高校という百戦錬磨の先進強豪校相手に一步も引かず立ち向かっていったが、自分だったら初めから諦めてそんな無謀なことは考えもしない、その覚悟や闘志はどうてい及びもつかないと語る。

— しかし、と思う。実は桑原氏も彼らと同根の士ではあるまいか。チャンスを得るや負けじ魂に火を点し、強敵の伝統校に全身全霊を込めて挑んでいったはずである。その敢然とした姿勢に刺激を受けて後に続くチームが続々と名乗りを上げてきたのではなかったか。選手に求めてやまなかった闘志あふれるプレーと勝利へのあくなき執念は、そのまま氏の内なる信念でもあったように思えてならない。

[文責：顕彰事業委員会]